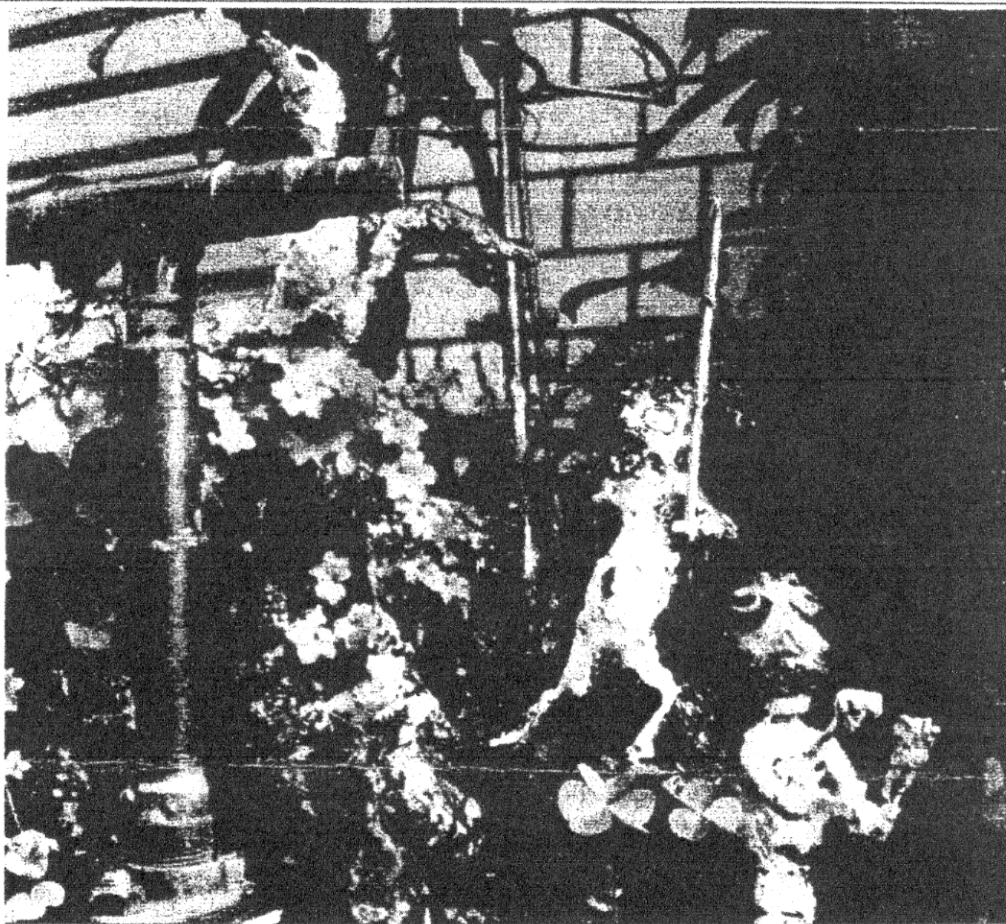


あいだ

65

発行＝美術と美術館のあいだを考える会

2001年5月20日発行 1部300円



東京・板橋区 2001 (水道店店主の制作, アッサンブラージュ) Photo. Fukuzumi Haruo

あいだ65号 目次

探偵小説絵画論——19世紀西欧の、ある種の風景における空間認識とまなごしに関する一考察 (前編) 谷内克聡 ……28

〈貴賓席〉西村論文を読んで 白川昌生 ……28

連載：絵描き共の変てこりんなあれこれの前説16

そして、赤瀬川千円札裁判が始まった 今泉省彦 ……29

連載：まなごしのフィールドワーク [26] 倉敷まで唐賣を見に行った 山口昌男 ……32

《再録》真に豊かな日本の未来のために——21世紀の文化芸術大国をめざす公明党の政策 ……35

連載：八丁堀通信 (10) 夢戻りのひと月 山口勝弘 ……36

連載：美術の条件 (9) 第1部：歴史的観点

第2章 岡倉天心とその『日本美術史』について 3 倉林 靖 ……39

編集雑記 ……44

連載：八丁堀通信 (10)

夢戻りのひと月

山口 勝弘 (美術家)

4月27日(金)の夕方に神戸へ入った翌日、京阪神地域の友人や知人が久しぶりに集って小生の毎日芸術賞受賞のお祝いをして下さった。一昨年に神戸芸術工科大学で栄退記念の展覧会をやった以来、存在の比重が東の方へ移ってしまっていたので、祝いの会の企画を開いたときには喜んで受けていた。兵庫県の貝原知事も忙しい中で作品の上映を御覧下さり御挨拶もいただいた。淡路からも地域の文化活動と21世紀の淡路デザイン会議のまとめ役の磯崎泰博さん、いまやカワラマンとして有名な山田篤二さん、そして一番うれしかったのは一宮町の地域史研究をしている濱岡きみ子さんが駆けつけて下さったことだった。もちろん神戸、大阪、京都からもたくさんの方々に来ていただいた。大阪は30年前の大阪万博以来、神戸はポートピア以来の関係である。

それが終わって淡路で一休みと思っていたら、ちょうど岡山県の奈義MOCA(奈義町現代美術館)で宮脇愛子さんの展覧会のオープニングが5月1日にあるという。一応時間の計算をして1時過ぎに着くつもりで出掛けたのだが、途中で時刻表を調べて姫路からローカル線が津山まで行っているのだからこれを利用したら、向こうへ着いたのが3時前。アメリカほど広くないのに、日本も車社会になっているのを思い知らされた。

奈義MOCAには開館の時に訪れて以来2度目で、選ばれた4人の作家のために建てられ、作品の半永久展示が目的の美術館。その後はどうなっているかというヤジウマ根性もあって出かけたのだが、宮脇さんの

ドローイングだけを静かに鑑賞するにはよい機会だった。白い和紙を横にひろげた大作が、まるで楽譜のように見えた。いわゆる図形楽譜ではないのに「うつろひ」の音が聴こえてくるように感じる。さらに泥紙に描かれたものは、パシッパシッとした筆跡が雀か燕が舞い飛んでいるように見えて自然な風姿のままである。これが見られただけでも良かったと思い、また宮脇さんとお目にかかれたことも喜びだった。奈義MOCAの建物を確かめるのも忘れてしまっていた。

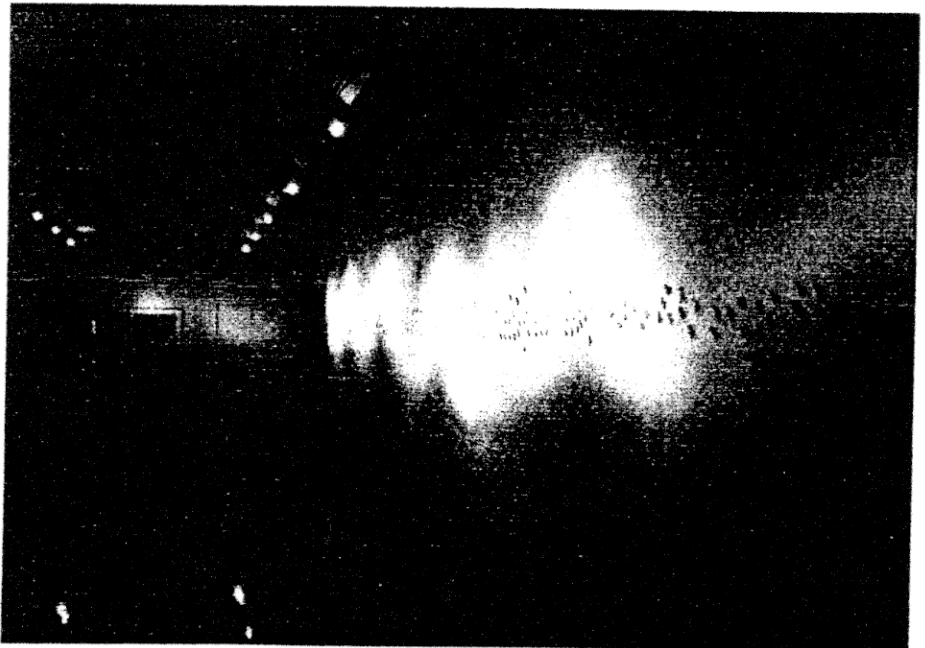
それから2日後に西新宿のオペラシティのコンサートホールで「実験工房」の作曲家湯浅譲二さんの新作「クロノプラスチック3」を聴いた。この曲の作曲にここ半年ほど彼が没頭していたことを知っている。指揮者は中国生まれの作曲家タン・ドゥンさんである。湯浅さんの曲は前の二作よりも音域の重なりが深くなり曲のダイナミズムよりも聴く側の心のマッサージ効果が増したように思った。というのは聴いていながら数瞬の眠りのうつろいをもったからである。老境という言葉は使いたくないが、やはり宮脇さんの絵も湯浅さんの音も50年という経験のはたらきから生まれたものである。

ところで先日亡くなられた勅使河原宏さんの告別式に伺えなかったのが、5月12日(土)に草月会館で開かれた会に出かけてお別れをした。宏さんとも50年前の「世紀の会」から草月アートセンターでの「ジャズとエトセトラの会」をへてさまざまに出

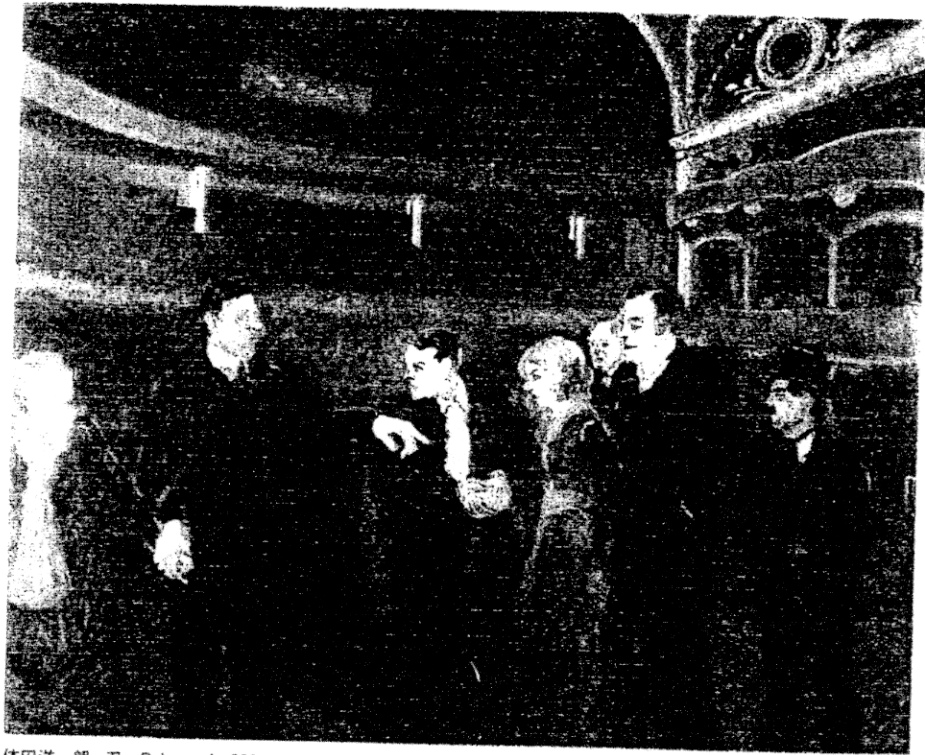
会いが重なっている。竹のインスタレーションの間に配置された写真を眺めているときに、上の階でお休みになりませんかというお誘いがあり上ってゆくと、蒼風さんと霞さんの遺影の前に宏さんの写真があってお焼香をした。ふと奥の部屋をみると昔の草月ホールに飾ってあったジョルジュ・マチューの絵がある。案内の方の話では、この絵をマチューの回顧展に並べたいと関係者からの話があったのだが、もうここから運び出せないで実現しなかったのだそうだ。チューブから直にしばり出された絵の具が固まっているから普通の油絵のように巻けないし、かといって窓から出そうとしてもクレーンが下に立たないらしい。その後地下のホールで宏さんの初期の映画2作品を見た。『ホゼー・トレス』と『動く彫刻 ジャン・ティンゲリー』。久しぶりに見てふと気づいたこと。前者はボクサーのドキュメンタリーでありながらチャンピ

オンになった場面もなく、ティンゲリーの場合もオープニング・パーティーの賑やかな場面がなかった。それは、のちに『砂の女』や『利久』を撮った彼の、いかにも初期作品らしい初々しさと重なっているように思った。ところでこのドキュメンタリーの撮影の頃にティンゲリーを東京下町のジャンク屋へ案内したのは僕だった。みんなあの頃はジャック・タチの映画『ぼくの伯父さん』のように暇だった。

最近画廊で見て考えさせられた絵がある。ギャラリー手でみたニューヨークの42番街のすでに無くなってしまった映画館や劇場の中ばかり描いている依田洋一朗さんの作品である(5月14日-26日)。最初は不思議な遠近法を使っている画面構成が面白いと感じていたのだが、古き良き時代を追ったノスタルジックなものとは全く違うことに気づいた。数日後もう一度出かけて、劇場が壊されている場面や長い年月開いていたラ



「墨によるうつろひドロ잉 宮脇愛子展」 奈良町現代美術館 (写真提供：作家)



依田洋一朗 The Rehearsal 2001

ンチョネットの店仕舞の様子をえんえんと撮影したビデオを見せてもらった。そうだったのか。この作者はいかにも古きNYらしい一画が消えてゆくところをカメラで撮りながら、あの劇場の中で上映された映画のシーンを頭の中で紡ぎだしていたのか。記憶をテーマにしたこんな絵の方法論がある

ことに気づかされたものだった。いま雨の淡路からの便り、明日はようやくオープンする台北の美術館、ICAへ向かうのでこれは来月の報告にしたい。

去るものを 追いつつもふと 夢戻り

[美術と美術館のあいだを考える会 講座]

美術館の危機を語り尽す 最終回

ゲストスピーカー：貝塚 健（ブリヂストン美術館）／横山勝彦（練馬区立美術館）

日時：6月29日（金） 午後6時30分～（6時開場）

場所：池袋・東京芸術劇場 小会議室7

会場費：¥500

*参加ご希望の方は、6月20日（水）までに事務局（tel.03-3976-7203, fax.03-3976-9043）へお申し込みください。